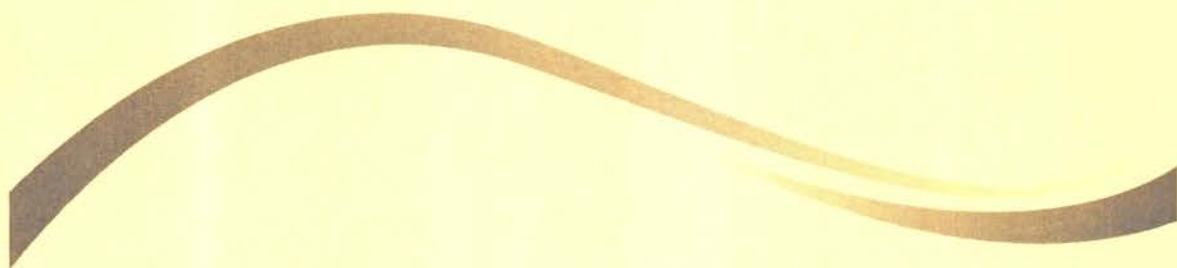


Ⅲ－３ 高等部の実践



Ⅲ－３ 高等部の実践

1. はじめに 69
 - (1) 高等部におけるキャリア発達支援の位置づけ
 - (2) これまでの作業学習の課題
 - (3) 「作業学習の充実改善」と「外部講師の活用」によるキャリア発達支援の取り組み
 - (4) 本校作業学習の概要

2. 作業学習モデルプランの開発 72
 - (1) 「プラタナスカフェ」の取り組み
—大学、大学生協と協同した実践的作業学習—
 - (2) クリーン工房の取り組み
—社会人と協働する作業学習—

3. 地域資源を活用した実践
「チャレンジ工房の製品がどのように役立っているのかを知ろう」・・・ 87

4. まとめ 90
 - (1) 実践的試み
 - (2) 成果と課題

Ⅲ－３ 高等部の実践

１. はじめに

(１) 高等部におけるキャリア発達支援の位置づけ

本校高等部でめざす生徒像は「卒業後に自分が希望する生活の実現をめざして切磋琢磨する」というものである。学校から社会へ移行するための準備期間ともいえるこの時期のキャリア発達支援の内容としては、生涯にわたる生き方にかかわるプロセス⁽¹⁾を視野に入れつつも進路学習や多様な就業体験などの「進路指導の充実」と、作業学習の改善や外部講師の活用などの「授業改善の試み」が主なものになると思われる⁽¹⁾。

(２) これまでの作業学習の課題

本校における従来の作業学習では教師の指導のもと校内での作業や外部からの委託作業を行っていた。そこでは生徒の緊張感に温度差が見られる様子や、技術向上の意識や仕事の完成レベルを高く持とうとする意識が必ずしも高いとはいえない姿が見られた。

また、自分たちが作業学習で作った製品が社会の中でどのように役立っているのか、認められているのかについては作業学習の中で十分に押さえきれていない側面があった。

一方、生徒に将来の目標を持って働く力を養い、キャリア発達を更に促すためには校内資源にとどまらず、「社会との相互作用の中で生きる⁽²⁾」機会の提供やその中で実践的な作業経験を積むことが必要ではないかと考える。

(３) 「作業学習の充実改善」と「外部講師の活用」によるキャリア発達支援の取り組み

① 作業学習モデルプランの開発

そこで今年度はキャリア発達支援の視点から従来のしくみにとられない新たな形の作業学習モデルプランの開発を目的として以下の２つの実践的試みを行った。

ア. 大学生協、大学と協働した実践的作業学習の展開

具体的には金沢大学附属図書館医学図書館にカフェを開設した。

作業学習での生産物の販売活動は、地域の協力の下に様々な形で地域の特色を活かしながら取り組まれてきた⁽³⁾。カフェや喫茶の取り組みでは北海道の小樽高等支援学校⁽⁴⁾や京都市の白河総合支援学校⁽⁵⁾、東京都の青鳥特別支援学校⁽⁶⁾や南大沢学園⁽⁷⁾、高知大学教育学部附属特別支援学校⁽⁸⁾などの先行実践がある。今回の取り組みは学外に店舗を構えて販売だけではなくて店舗の運営や商品の流通をも含めた営業全体を実践的に学ぶ場としての意義があると捉えている。医学類学生にとっても将来医療従事者として様々な人と関わる事が予想され、本校生徒との関わりは将来的に役立つ経験となる事が予想される。

イ. 障害のある社会人と共に働きながら学ぶ作業学習の展開

金沢大学が雇用するジョブコーチと障害のある社会人２名とが本校に定期的に出向し、生徒と共に本校の環境整備作業を行った。

作業学習における外部人材の活用による取り組みは全国に目を向けると広島県立広島北特別支援学校の「ビルメンテナンス作業」⁽⁹⁾、静岡県立東部特別支援学校伊豆高原分校の「公園の清掃業者」、「みかんの園芸業者」との連携⁽¹⁰⁾、岡山大学教育学部附属特別支援学校の「岡山大学農学部学生との作業学習」⁽¹¹⁾などの先行実践が見られる。今回の取り組みではジョブコーチと障害

のある社会人が作業学習の時間帯に年間を通して来校し、生徒との協働作業を行うことで社会人の仕事の様子を実践的に学ぶ機会としての意義があると捉えている。障害のある社会人にとっても生徒の見本として働く意識や自律的態度の向上が期待できる。

② 地域の人材を活用した授業実践

作業学習の製品の納入先等の事業所の職員を講師として、納入した製品がどのように使われ、どのような評価を受けているのかを理解することを目標とした授業を実施した。

講師の方にとっても本校生徒と対面して話げできたことが双方の理解を広げるうえで良い機会となったと思われる。

本研究ではキャリア教育の理念を日頃の学習活動の中にどう具現化するのか、そして実践的試みを通して社会との相互作用における生徒のキャリア発達の変化とその関係、そこでの教師の役割について考察した。

(4) 本校高等部の作業学習の概要

本校高等部では、火曜日と木曜日の各5単位時間・計週10単位時間、作業学習を行っている。今年度は、菓子工房（クッキー製造、パッケージ、材料購入・納品）・クリーン工房・チャレンジ工房の3つの工房に分かれて取り組んでいる（71ページ、図Ⅲ-3-2参照）。

作業活動での課題や生徒間の相性等を考慮し、生徒が高等部の3年間で2つ以上の作業種を経験できるように、教師が各工房のメンバー編制をしている。

また、本校の作業製品全体に「プラタナス」というブランド名をつけている。ブランド名の由来は本校敷地内にあるプラタナスの木に由来している。図Ⅲ-3-1は「プラタナス」ブランドのロゴである。



図Ⅲ-3-1 プラタナスのロゴ

引用文献

- (1) 松矢勝宏 (2011) 「特別支援教育におけるキャリア教育の構想と展開」
石川県立小松特別支援学校 平成23年度教育講演会 講演内容
- (2) 渡辺三枝子 鹿嶋研之助 若松養亮 (2010) 「学校教育とキャリア教育の創造」学文社
- (3) 森脇勤 (2014) 「キャリア発達を促す地域協働型活動の創造」特別支援教育研究 687号
東洋館出版社
- (4) 北海道小樽高等支援学校ホームページ
- (5) 京都市立白河総合支援学校ホームページ
- (6) 東京都立青鳥特別支援学校ホームページ
- (7) 東京都立南大沢学園ホームページ
- (8) 高知大学教育学部附属特別支援学校ホームページ
- (9) 広島県教育委員会 (2011) 「特別支援教育 作業学習ハンドブック」
- (10) 松本美智枝 (2008) 「知的障害のある生徒の働く意識を高めるための企業と連携した作業学習のあり方」 国立特別支援教育総合研究所研究紀要 35巻
- (11) 岡山大学教育学部附属特別支援学校ホームページ

プラタナス

菓子工房

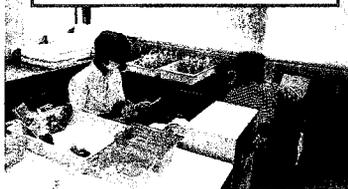
材料の購入・納品



クッキー作り



パッケージ
クッキーショップ



プラタナスカフェ
(医学図書館カフェ)



連携：金沢大学生協
H銀行

クリーン工房

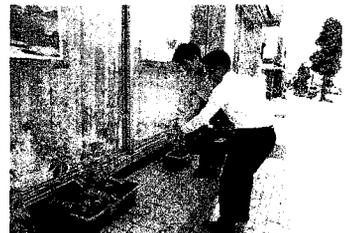
社会人との協働作業
による運動場の除草



校舎の窓拭き



地域との連携



連携：金沢大学
H銀行

チャレンジ工房

緩衝材作り



バリとり



拭き取り用
ペーパー作り



シュレッダー



連携：K化学株式会社
T雑貨店

販売活動：校内販売・金沢大学生協・金沢大学附属図書館医学図書館・附属高校開校祭・
学習発表会・教育研究会・産業教育フェアなど

図Ⅲ-3-2 本校高等部の作業学習の概要

2. 作業学習モデルプランの開発

(1) 「プラタナスカフェ」の取り組み ー大学、大学生協と協働した実践的作業学習ー

① はじめに

金沢大学附属図書館医学図書館に開設された「プラタナスカフェ」は、パッケージ班の生徒がショップスタッフとなり運営に携わっている。今まで校内でのみ取り組んでいた作業種であったが、カフェ開設により、「一般社会」に近づいたお客様とのやり取りや商品流通を体験することができるようになった。開店、運営には、金沢大学附属図書館医学図書館、金沢大学医学類同窓会、大学生協の多大な協力があつた。

② 「プラタナスカフェ」の概要

ア. 構成

生徒の所属するパッケージ班は1年生3名、2年生1名、3年生1名の5名の生徒と、3名の教師で運営している。3年生の生徒は昨年度から引き続き在籍しているが、ほかの4名は今年度初めて本作業班に所属した。「プラタナスカフェ」には5名の生徒全員が関わっている。

イ. 活動内容

パッケージ班は、製造班の焼き上げたクッキーの袋詰め、パッケージ作成、受注・納品を行っている。クッキーは主に本校の保護者や職員に販売したり、現場実習や外部講師派遣のお礼として納品したりしている。その他、金沢大学生協や金沢駅構内にある友愛ショップなど、大学や地域とのつながりを生かし商品を卸している。昨年度からは、作業室内で「クッキーショップ」を開店し、袋詰め作業と並行して対面販売も行っている。また、今年度は「プラタナスカフェ」の開設を念頭に置き、「クッキーショップ」にてコーヒーの販売にも取り組み、医学図書館での「プラタナスカフェ」の活動につなげている。

③ プラタナスカフェのねらい

ア. たくさんのお客様とのかかわりを

生徒たちは仕事の内容や方法、ふさわしい言動・行動を知識として知っているが、突発的な場面で判断し、対応することが難しい。また、近年、障害者雇用は医療・福祉、サービス関連業分野にも広がりを見せており⁽¹⁾⁽²⁾、接客技術の習得という面でも、卒業後の生活に生きるであろうと考えられる。

- 
- ・ 不定期に訪れるお客様に対し臨機応変に考え、その場にふさわしい言動・行動を判断する経験を重ねる機会となるのではないか。
 - ・ 図書館カフェは、学校関係者以外の生徒を知らないお客様と接する場となり、緊張感を持って、より現実的なやり取りを体験できるのではないか。
 - ・ 接客に対するお客様のリアルな応答を即時的に体感することは、生徒にとって明確な評価となり、生徒の行動変容に結びつきやすいのではないか。
 - ・ 図書館を利用する医学類学生にとっても、医療従事者として様々な人とかかわることが想定され、本校生徒とのかかわりは将来的に役立つ経験となるのではないかという見方もできる。

イ. 社会に触れる経験を

従来の本作業班は、商品のやり取りも校内で完結しており、生徒にとって社会の一員として自分が存在しているという意識は持ちにくい。取り組んだ仕事がどのような役に立っているのか、商品はどのように流通しているのか、仕事の位置づけや意味・価値について意識する機会も少ない。

来店されるお客様とのやりとりや、コーヒーの納入先である大学生協などのやり取りを通し、している仕事と社会との結びつきを知り、自分の生み出す利益や存在意義を意識することで、勤労意欲を引き出すことはできないか。

④ 取り組みの実際

ア. 店舗立ち上げまでの経緯（日程）

（ア）設置のきっかけ

接客やその内容、商品販売の場を広げていくことへの模索が続いていたところ、医学図書館にてカフェ開設の話をいただくことができた。10月に行ったオープニングセレモニーには、金沢大学学長をはじめ、医学図書館職員、大学職員、大学生協の方と多くの参加者があった。



オープニングセレモニーの様子

（イ）立ち上げの準備

医学図書館、生協とは平成26年3月より話し合いの場が持たれた。資材などを整える「教師の動き」と、接客技術トレーニングなどにかかわる「生徒の動き」の2つの観点で準備を進めた（表Ⅲ-3-1参照）。また、新店舗開設という稀有な機会であり、生徒にもこの機会を体験して欲しく、生徒たちが「自分たちの店」と意識して開店を迎えることができるよう、教師の仕事と生徒の動きを関連付けながら準備を進めることにした。

表Ⅲ-3-1 立ち上げまでの主な日程

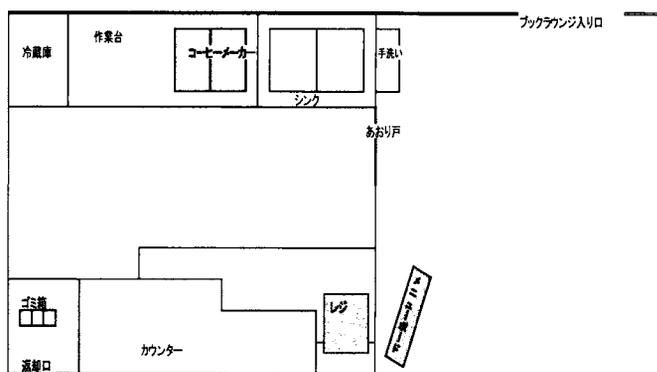
月	主なイベント	教師の動き	生徒の動き
3月	運営方法の検討開始	<ul style="list-style-type: none"> 医学図書館、大学生協との初回打ち合わせ 	
4月	新年度作業学習開始	<ul style="list-style-type: none"> 営業計画、収支計画案作成 学習活動、活動内容の分析 勤務体制作成 	<ul style="list-style-type: none"> クッキーショップでの接客開始 カフェオープンについて知る 基本的な接客練習（先輩から後輩へ） クッキーショップの模様替え
5月	コーヒーショップ体験	<ul style="list-style-type: none"> 価格、メニュー案作成 カップなど備品発注 	<ul style="list-style-type: none"> 価格検討 お客様体験 環境整備、制服決定
6月	校内にてコーヒー販売開始 ・身近な教師へ ・保護者へ（参観日利用）	<ul style="list-style-type: none"> 価格、メニュー決定 図書館カフェの備品等納入方法の決定 	<ul style="list-style-type: none"> コーヒー調理、販売練習 コーヒー販売開始 店舗名決定

7月	アイスコーヒー販売開始	<ul style="list-style-type: none"> 学校へ冷凍庫搬入 店舗ロゴ作成 	<ul style="list-style-type: none"> アイスコーヒー調理、販売練習 カップ、什器などの備品検討 1学期の反省
8月	夏季休業 図書館カフェ設備受け渡し	<ul style="list-style-type: none"> カップ、什器などの備品発注 学校へ冷蔵庫搬入 保健所申請審査 	
9月	図書館カフェプレオープン ・すずかけクッキーの販売 ・コーヒーの試飲	<ul style="list-style-type: none"> 製造班との生産打ち合わせ 店舗整備 メニュー表、ポスターの作成 勤務体制の決定と栄養教諭、事務へ連絡 コーヒー発注 	<ul style="list-style-type: none"> 目標の再確認 校長はじめ他教員の評価依頼 図書館カフェでの実践練習 機器の取り扱い練習、保管方法など(レジ、衛生面に配慮した清掃、備品の保管場所)の検討
10月	オープニングイベント 通常営業開始	<ul style="list-style-type: none"> 備品、環境整備 作業日報の整備 備品の発注 スタッフ業務、勤務体制の再分析、試運転 送迎担当者との打ち合わせ 	<ul style="list-style-type: none"> 仕事のしやすい環境に改善(備品、日報、棚の配置) 備品の在庫管理 アイドルタイムの仕事実践 シフト管理 イベントでの試飲会実施 2学期の中間反省①
11月	学習発表会	<ul style="list-style-type: none"> レジスター設定 スタッフのシフト決定 備品の発注 	<ul style="list-style-type: none"> 接客の実践 「お客様の声」によるフィードバック 備品の在庫管理 2学期の中間反省②

(ウ) 設備の様子

ブックラウンジには10卓ほどのテーブルがあり、学生が自由に利用できるスペースとなっている。「プラタナスカフェ」はその一角に設置された(図Ⅲ-3-3参照)。

図書館カフェ 環境図



図Ⅲ-3-3 プラタナスカフェの様子



プラタナスカフェの様子

(エ) 勤務体制

早番と遅番のシフトで運営する(表Ⅲ-3-2参照)。それぞれ1~3名の生徒が担当し、週2日の作業学習のうち1~2回はカフェ勤務がある。スタッフ構成は一定でなく、その日に組んだ相手と協力し、互いに得手不得手を生かしながら仕事に取り組むことを目指している。

イ. スタッフトレーニング

(ア) トレーニングで大切にしたこと

生徒がする仕事(表Ⅲ-3-3参照)を「自分の仕事」として意識し、自ら習得・改善する意欲を引き出すことである。そのために、プラタナスカフェを「自分たちの店」として意識し“よい店づくり”を目標とし、スタッフ一同、一致団結して取り組むことを目指した。

表Ⅲ-3-2 一日の勤務体制 生徒たちは過密なスケジュールに対応している

学校		早番	勤務時間		遅番	勤務時間	
1時間目	9:10	からだづくり(通常授業)		9:10	からだづくり(通常授業)		
2時間目	9:40	学校発(公用車)	↓	9:40	パッケージ開始	↓	
	10:00	医学類着 オープン準備			10:00		クッキーショップ開店
3時間目	10:30	カフェオープン			11:30		クッキーショップ閉店
4時間目				11:50	パッケージ終了	2時間10分	
				12:00	給食		
				12:35	学校発(公用車)		
				12:45	医学類着	↓	
	12:50	医学類発(公用車)		12:50	業務引き継ぎ		
	13:00	学校着	3時間20分				
	13:05	給食					
5時間目	13:30	(パッケージ班開始)					
6時間目	13:40	クッキーショップ開店	早番はここから勤務	14:30	カフェクローズ	↓	
					閉店処理		
	14:30	クッキーショップ閉店		14:50	医学類発(公用車)		
	14:50	パッケージ終了	1時間10分	15:00	学校着	2時間25分	

表Ⅲ-3-3 作業内容

レジ(カウンター)	コーヒー(バックカウンター)	フォロー(フロア)
■ 開店準備		
台拭き、消毒	台拭き、消毒	床掃除
クッキー陳列	冷蔵庫温度確認、氷作り	手洗い洗剤補充
ミルク、砂糖、マドラー補充	カップ、K-cup 補充	ペーパータオル補充
おつり準備		水周り掃除
ゴミ箱		カウンター外側掃除
		看板設置
■ お客様対応		
お客様へのあいさつ	お客様に挨拶する	お客様に挨拶する
受注と連絡	コーヒー調理	各担当のフォロー
金銭授受	商品提供	
	お客様へ砂糖ミルクの案内	
お礼と見送り	お礼と見送り	お礼と見送り
■ その他の仕事		
開店準備に準じる		
■ 閉店業務		
商品、備品収納と在庫確認	商品、備品収納と在庫確認	看板収納
レジしめ	カウンター整理、清掃	床掃除
カウンター整理、清掃		水回り掃除
		台拭き洗浄

(イ) 店舗開発を生徒とともに

使用する備品やメニュー表、什器の配置、店舗名の決定、制服の決定など、生徒とともに決められることはできるだけ生徒と共有するようにした。プラタナスカフェを「自分たちの店」と意識し、自分や店舗を改善していこうとする気持ちを引き出すことになったと考える。



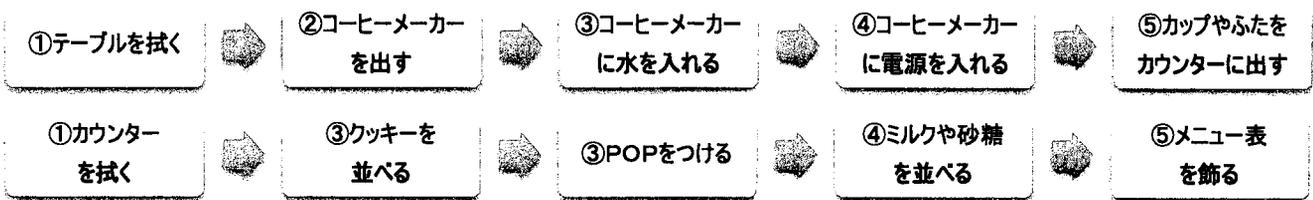
- ・ 多少厳しいシフトや作業内容にも、弱音を吐かず応えるようになった。
- ・ 自分から仕事を探して、取り組むようになった。
- ・ 言葉遣いや態度など、接客技術をスタッフ同士指摘しあい、改善するようになった。
- ・ 自己評価表の利用や、お客様アンケート、スタッフ以外の教員の評価を求めてきた。

(ウ) 手順でなく、項目で指導

厚生労働省のサイト⁽³⁾を参考に、仕事を継時的にマニュアル化された手順(図Ⅲ-3-4 A参照)でなく、ユニット化(図Ⅲ-3-4 B参照)して提示した。教師の考えた“系統的な手順を覚える”ことに労力を費やすのではなく、仕事の最終目標(その仕事のねらいと意図)を大切に、そのために必要な作業内容があることをユニット化して項目(図Ⅲ-3-4 B参照)として提示した。また、必要な道具の保管場所を構造化した。

- ・ 手順を義務的にこなすためではなく、生徒たちが必要に応じて、自発的にチェックシートを“覚書”として参考にできるようになった(表Ⅲ-3-4参照)。
- ・ 自分の担当する仕事だけでなく、終了していない仕事にも協力する姿勢を見せ、率先して取り組むようになった(写真参照)。

A 系統的な手順表記 手順の継時的記憶が必要 他者の介入が「協力」より「交代」になりがち



B ユニット化した作業項目表記 個々に過程を工夫できる 手順を中断することにならず協力しやすい

コーヒーの準備

- 目的 お客様にコーヒーを提供できるようにする
- ポイント 美しく、仕事をしやすく
- 情報提供 各備品の保管場所

清掃 コーヒー カップなど備品

設置

水

レジの準備

- 目的 会計と商品渡しができるようにする
- ポイント 美しく、わかりやすく、仕事をしやすく
- 情報提供 各備品の保管場所

清掃 商品陳列 POPづけ

備品陳列 メニュー表

図Ⅲ-3-4 開店時における手順表記と項目表記の例



各々で準備を進める様子



接客の様子

表Ⅲ-3-4 開店時およびお客様がいない間に取り組む作業内容チェックシート

アイドルタイムのおしごと		/ ()			
		1	2	3	4
コーヒー	台ふき				
	コーヒーメーカー				
	水				
	備品				
	かごそうじ				
	その他				

アイドルタイムのおしごと		/ ()			
		1	2	3	4
レジ	台ふき				
	クッキー補充				
	ミルクなど補充				
	おつり				
	ゴミ箱				
	その他				

(エ) 目標を行動レベルで言語化する

“よい店づくり”から、「丁寧な接客をしよう」「清潔な店員や店舗を心がけよう」「素早い接客をしよう」という意見が出されたが、すぐに行動に表れ、改善に結びつくわけではなかった。これらを「両手で商品を渡す」「髪の毛は帽子に入れる」「ほかの仕事をしていたら、すぐに道具を手から放す」など具体的にことばにして伝えることが必要であった。

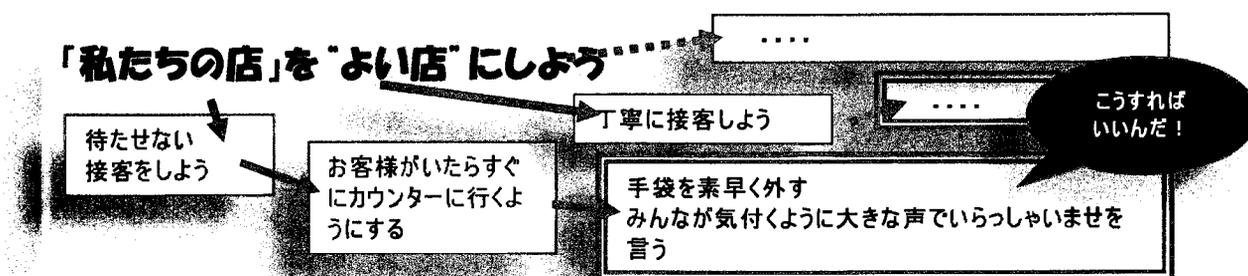
- ・ 「思っているより大きな声でいいじゃない」など、スタッフ間でも、相手がわかる伝え方でアドバイスをするようになった。
- ・ 校内で袋詰め作業をしているときも、すぐに手袋をはずして接客に向かうようになった。
- ・ お客様アンケートや、校長をはじめとしたスタッフ以外の教員の評価を求めるようになった。

⑤ 評価と考察

ア. 自分の仕事に意図を持つこと

プラタナスカフェを「自分たちの店」として捉えることで、“よい店づくり”の意識が生まれ、ベースとなる目標が共通認識できた(図Ⅲ-3-5参照)。行動目標を生徒の言葉で具体化することで、生徒は実際に取り組むようになった。また、形だけ整った接客ではなく、生徒はそれぞれが自分の言葉でお客様に対応するという、柔軟な接客をしていることから、自分の意図をもって仕事に臨んでいると考えられる。言い換えれば、自分の行動の意味や、目的がわかるからこそ、臨機応変に判断し、実際の言動・行動につながるのだろう。

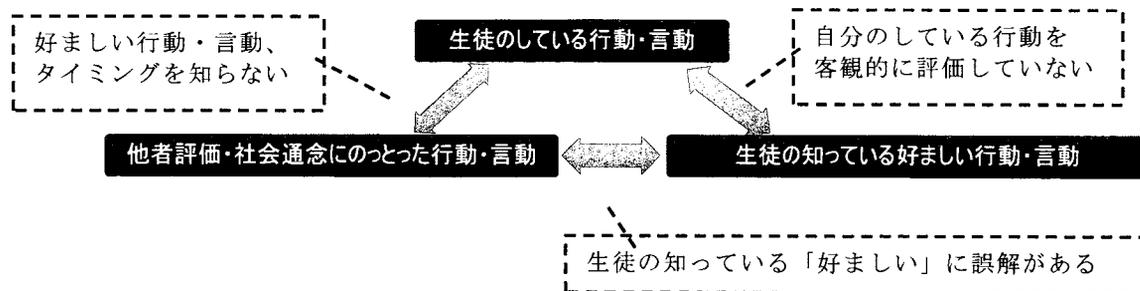
しかし、行動目標が具体化され、改善が必要と分かっているにもかかわらず実際の行動につながらない場合



図Ⅲ-3-5 目標をベースにした行動目標づくり

行動の全てに共通した上位目標があることでチームの方向性も明確になり、行動に意味づけできる

もあった。つまり、自分の言動、振る舞いを振り返り「良い」か「要改善」か気づかない場合、判断がつかない場合があるのだろうと考えられる。例えば、図書館の方に「トイレどこ？」と聞いてしまった生徒は、それが好ましくない言葉遣いであることを知らなかったと話している。また、「50円のおつり・・・」と語尾が途切れがちになっていた生徒も、自分では伝えているつもりでいたと言っていた。生徒の自己判断に任せる分、自己評価、自己理解、他者評価や社会通念の間のずれ(図Ⅲ-3-6参照)を、いかにすり合わせていくかが、課題であると考えられる。



図Ⅲ-3-6 自己評価、自己理解、他者評価・社会通念の間のずれ

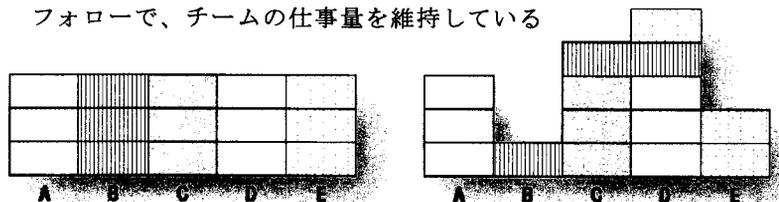
イ. 仲間意識の育ち

「自分たちの店」という意識はスタッフの連帯感も生み出した。失敗した人、体調の良くない人を責めるのではなく、どうやってフォローしようかと考えている。立ち仕事に不慣れな下級生に対して座って行う仕事を勧めたり、看板を抱えて表に出しに行く仕事を交代したりする様子が見られている。互いに補い合い、チームとしての生産性を維持することを学んだようだ。

ウ. 本当に体験するということの大切さ

例えば生徒の対応に改善点があった場合に、それを教師から伝えたとする。生徒は教師から叱られたと感じ、委縮することもある。また、行動の改善が見られたとしても、本来の目的“良い店づくり”からは離れ「叱られるのが嫌だから」という回避的な気持ちが伴う場合もある。教師がいなくてはしないという状況につながってしまうことも考えられる。後述のA男も、普段そのような傾向があった(表Ⅲ-3-5参照)。

B、Eの仕事量が減ったとしても、他スタッフ(CD)のフォローで、チームの仕事量を維持している



図Ⅲ-3-7 個人の仕事量とチームの仕事量

プラタナスカフェでこの出来事である。A男は商品を手でお渡ししようと、カップ全体を両手で包み込んで差し出した。すると、男性のお客様はカップのどこを持ってよいか戸惑い、一瞬手を止めるということがあった。そして、お客様が帰られた後、A男とともにお客様について振り返った。教師がカップを包み込んでA男に差し出してみせた。するとA男は「あっ。」と言って、目を見開いて顔を上げた。「“お客様が受け取りやすいように”商品の少し下をもってお渡しする」という一歩前進した接客につながった出来事であった。

プラタナスカフェだからこそ、生徒との距離の近いお客様でないからこそ、起きた出来事である。そのお客様に実際に接した上で、すぐにA男とともに振り返ることもできた。“教師から叱られないように”という目先の目的ではなく、“お客様が受け取りやすいように”というお客様の視

点に立った行動につながった。注意や指摘を受けた後の生徒の表情はどこか暗い。しかし、生徒の「あ、そうか！」の表情はとても明るく、上を向いている。A男の表情もまさにそのとおりであった。

エ. 生徒とのやり取りから

生徒とやり取りをする中で、見えてきたことがある（表Ⅲ－３－５参照）。

表Ⅲ－３－５ 生徒の様子とのやり取りのまとめ

	A男	B子
生徒の様子	書字読字に困難があり、伝票の記入も遅い。敬語そのものや遣う場面を知らない。しかし、伝えたことはどんどん覚えて、徐々に、自分の言葉にし、お客様に対しての振る舞いも洗練されていった。	本作業班での販売経験は最も長い。仕事の内容を覚えるのも早かった。しかし、言葉遣いや振る舞いなど、ままごのような幼さが残っている。
場面①	コーヒーをお客様に渡す時に気を付けることを話し合っていた時のこと、カップに指が入ってしまわないようにしようという意見が出たときの感想。	
	「やけどする」 自分が体験する感覚を話している。	「きたない」 お客様の立場で得る感覚を話している。
場面②	プラタナスカフェの活動が始まり2か月ほどたったのち(11月)の感想。	
	「学校では出会えない人たちと会えるので、図書館の仕事の方が楽しい。」 一人でも外出しており、接客を受ける経験もしている。小学部時代から販売経験もある。格好よくいたいという気持ちがあり、どのような言動行動がよいか提言を聞き入れたり、見聞きした情報から取り入れたりしようとしている。興味関心が外部に向いており、行動変容につながる情報収集ができているのではないかと考える。	「学校での作業の方がいい。取り組みやすいから。」 「うまくやれるか不安。」 小学校時代は友だちの後を追って遊ぶことが多かったようである。現在、休日に友達と会うことはあるが、限られた友達と家の中で過ごすことが多い。留守番していることも多く、外部の人とかかわったり、働きかけたりすることも少ない。そのためモデルとなる好ましい言動・行動も知らず、接客に関しても価値判断が難しいようである。

(ア) 「生徒の気づき」への「教師の気づき」

場面①より「誰が」きたないのか、「誰が」やけどするのかといった問いかけから、お客様の立場にたつとはどういうことなのか、どんな視点でものを見ることなのかということについて、生徒とともに考えることができた。ホスピタリティーの精神に加え、相手の気持ちを考えること、推論することが苦手であるといった、生徒の「特性」についても触れることができた。技術的な向上だけでなく、全人的な変容を促す働きかけをしていくには、「生徒の気づき」の機会を生かした働きかけが大切である。生徒の言動・行動にアンテナを張り「生徒の気づき」に気づくことができるような目を教師も養っていくよう、努めたい。

(イ) 生徒による行動変容の違い

場面②より、A男によると、「プラタナスカフェ」では、常に緊張感が伴っているとのことだった。同時に「でも、図書館に行くのは嫌じゃない。なんでかわからん。」とも言っていた。A男にとって、接客技術の大きな変容は顕著ではなかったかもしれないが、仲間とともに新しいこと、また、不安や緊張に立ち向かい、チャレンジしようとする意欲は、育まれているのではないかと

考えられる。しかし、A男自身はまだそのことを意識化していないのではないか。A男が自分で自分の頑張りを言語化し、認識できるような働きかけをしていくことも、今後取り組むべき支援の一つであると考えられる。

⑥ 成果と課題

ア. 成果

学校内ではお客様は保護者や職員であるが、プラタナスカフェでの来客は、生徒とは普段かかわりのない一般のお客様であり、一般社会での評価がある。校内であれば、多少聞き取りにくくても聞き返してくれるが、プラタナスカフェではそうではない。声が小さく聞こえなければお客様はお金を出してくれない。態度が悪ければ即座にお客様の顔は曇る。おつりの間違いやレジの対応の遅さも、学校ではお客様役の先生が教えてくれたり、できるまで待ってくれたりするが、プラタナスカフェでは許されない。逆に、よい接客ができれば、お客様はにこやかに応えてくださる。目の前にいるお客様が、生徒にとって最もわかりやすい講師となり、必然性のもとに、生徒の行動は変容し続けている。

コーヒーの仕入れでは、生徒からの「やってみたい」という発言から、生徒だけで医学類構内の大学生協に出向き、カウンタースタッフとやりとりし、発注書の提出、商品の受け渡しをすることに挑戦している。学校の外で面識のない人とかかわり、いつも誰かの目にさらされながら仕事をすることは、生徒に多大なプレッシャーを与えている。しかし、そんな緊張感の中でも、生徒から真摯に学ぶ姿勢、新たな仕事にも挑戦しようという姿勢を引き出すことができた。

イ. 課題

店舗開発、運営の実務的な点、物質的な点については、記録として残しやすい。しかし、OJTなど、勤務しながらかかわりの中で実施してきたトレーニングは、なかなか実証しにくい。根拠を明確にしながらかかわりながら、言語化や意味づけをしていくことが、教師にとっても課題である。

経営的な側面では店舗を維持していくこと、そして、生徒の取り組む仕事の量的、質的な維持・向上につなげるため、商品開発や、運営維持のための諸業務を精査し、今後、継続・発展させていくことも課題である。

生徒に関することでは、困難さ、わからなさを見極め、支援につなげるのが課題である。生徒に頑張っていることや、している仕事について尋ねると、ことばにできるものもあるが、回答に困る場合もある。教師の解釈で「生徒はわかっている」と思っていたことが「わかっていない」ことがある。逆もしかり、予想外のところで力を発揮したりすることもある。教師の「わかるだろう」という思い込みの指示でかえって混乱させることもある。生徒の「わかっていない」ところまで歩み寄り働きかけることが必要であった。生徒の姿を的確に把握し、どのように育てていこうか、支援に取り組もうか考え、さらに、将来に引き継いでいくことが教師の役目でもあり課題でもあると考えている。

参考文献

- (1) 厚生労働省（2014）プレスリリース（2013年11月19日）「平成25年 障害者雇用状況の集計結果」 <<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/>>

- (2) 文部科学省（2014）特別支援教育資料（平成 25 年度）「第 1 部集計編」
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1348283.htm>
- (3) 厚生労働省（2014 年 11 月閲覧）職業能力評価シート
<<http://www.mhlw.go.jp/bunya/nouryoku/syokunou/>>

(2) クリーン工場の取り組み —社会人と協働する作業学習—

① はじめに

クリーン工房では、学校敷地の環境整備や校内の美化を主とした活動を行っている。所属する生徒の職業的自立に向けたそれぞれの課題を解決するために、次の考え方で取り組んでいる。

- ・自己効力感や自己有用感を感じる経験を積む作業学習
- ・働くことや卒業後の就労を中心とした生活のイメージを持つことができる作業学習

そのことにより、授業や学校生活、さらには家庭生活や地域生活の中で、自らの課題に主体的に取り組む力が育成されることを目指したい。

クリーン工房の作業内容は、学校全体の環境を快適に改善しそれを維持するものであり、結果として児童生徒や職員から労いや感謝の言葉をかけてもらう経験を積むことが期待できる。さらに今年度は、地域資源を活用することで、地域の方からも同様の評価を受ける経験を積む。また、卒業後の生活に対する具体的なイメージを持つために、障害のある社会人と協働して作業活動を行い、生徒たちが社会人をモデルとして学習できるようにした。その取り組みの状況と成果等について報告する。

② クリーン工房の概要

ア. 生徒の実態

今年度は、2年男子2名、3年男子2名、合計4名の生徒が所属している。所属する4名の生徒はいずれも一般就労の可能性のある生徒であり、今年度初めてクリーン工房に所属した。今年度の作業に関わる実態等は、表Ⅲ-3-6のとおりである。生徒それぞれに課題はあるが、作業に対して、D男が中心になって、意欲的に取り組んでいる。

表Ⅲ-3-6 作業に関わる生徒の実態と作業学習の目標

	作業に関わる実態	作業学習の目標
C男 (3年生)	作業は丁寧で効率よく工夫しながら取り組む。現場実習前には気持ちが不安定になり作業中に気分が落ち込むことがある。	卒業後の就労や生活をイメージし、課題に取り組む。
D男 (3年生)	どの作業にも興味を持って意欲的に取り組む。周囲の様子が気になり集中力が途切れることがある。	卒業後の就労や生活をイメージし、課題に取り組む。
E男 (2年生)	作業は丁寧で効率よく工夫する姿も見られる。自分なりの楽しみを見つけながら作業を行っている。	働く経験を積み就労をイメージする。働くために必要なスキルを身につける。
F男 (2年生)	自分の得意とする作業を進んで行い、意欲的に取り組む。作業では周囲に人が少ない方が集中できる。	働く経験を積み就労をイメージする。働くために必要なスキルを身につける。

イ. 活動内容

(ア) 校内での作業

主な活動内容は、運動場や小学部中庭（なかよし広場）、畑周辺の除草、植栽の剪定や下草の除草、プランターの花苗植え、窓ふき等である（表Ⅲ-3-7参照）。一年を通してさまざまな作業種があり、作業量も確保することができる。除草や窓ふき、プランター作業は、成果がわかりや

すく、達成感ややりがいを感じることができる作業である。作業を行う中で、働く時の基本的なマナーや周囲の人に配慮した作業方法を身につけるよう取り組んでいる。

表Ⅲ－３－７ 今年度の主な活動内容

	協働作業	グループ別協働作業	別々に行った作業
5月	グラウンド除草		ゴーヤ苗植え（銀行との連携）
6月	グラウンド除草 なかよし広場除草		プランター作業 窓ふき
7月	なかよし広場除草 剪定 刈り込み 体育館倉庫片づけ		
8月			ワックスがけ 除草
9月	グラウンド除草	窓ふき 剪定 除草	チップづくり 土運び 木作業 花苗植え（銀行との連携）
10月		窓ふき 畑周辺環境整備	
11月			剪定 チップづくり 窓ふき 網戸洗い プランター作業
12月	しいたけ原木入れ替え 窓ふき		
1月	窓ふき 会議室環境整備		

（イ）地域と連携した作業

今年度は、地域連携の一環で、近隣の銀行の環境担当グループと連携して銀行前を季節ごとに花のプランターで飾る取り組みをしている。その他にも郵便局や交番の前にプランターを設置し、定期的に手入れを行ったり季節ごとに花の植え替えを行ったりしている。



近隣の銀行との取り組み



体育館の窓ふき作業の様子

③ 社会人と協働する作業学習

ア. ねらい

クリーン工房に所属する4名の生徒は、いずれも一般就労の可能性があり、そのうち3年生2名は、就労を視野に入れた現場実習を行っている。社会で働くために必要な技術や態度を作業学習の中で学び、普段の学校生活や現場実習で生かすためには、作業学習において、働く現場により近い雰囲気を作り出すことが必要であると考えた。そこで、本校の環境整備作業を行うために

派遣されていた障害のある社会人男性2名との協働作業を行うことにした。社会人男性2名は、県立の特別支援学校の卒業生であり、金沢大学総務部人事課に所属している。週5日間の勤務のうち、週3日間（火～木曜日）は本校で勤務しており、そのうち2日間をクリーン工房とともに活動している。また、金沢大学に所属するジョブコーチ1名も本校で週3日勤務している。

社会人と協働する作業学習を通して、生徒たちが彼らをモデルとしながら、お金をもらって働く意識や姿勢、技術の違いを学ぶ作業学習を目指したいと考えた。それは、指示されたり注意されたりして行動変容を促す作業学習から、目的意識を持ち必要性や意味を理解して自らの気づきにより行動変容を促す作業学習への転換を目指すことである。

イ. 取り組みの実際

(ア) 作業活動

1学期は、お互いのコミュニケーションをとること、社会人と自分たちの違いを早い段階で実感することを目的として、全員で同じ作業をする時間を多く設定した。

2学期は、生徒1名と社会人1名をいろんなパターンで組み合わせ、それぞれのグループに教師またはジョブコーチを配置し、今までの経験を生かして自分たちで進める作業と、教師やジョブコーチの指示を受けて進める補助的な作業を行った。



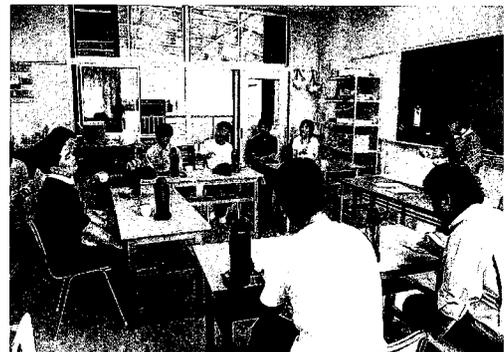
全員で行ったグラウンドの除草の様子

(イ) ミーティング

クリーン工房では、これまでにミーティングを4回行っている。ミーティングを通して、課題を解決するために考えて納得する答えを導き出すこと、社会人の意見をモデルとして卒業後の就労や生活をイメージして考えることをねらいとしている。

表Ⅲ-3-8 ミーティングを行った時期とテーマ

回	月	テーマ
第1回	6月	給料について
第2回	7月	作業にふさわしい服装
第3回	10月	窓ふき研修会
第4回	11月	作業中間ふりかえり



ミーティングの様子

【作業にふさわしい服装について（7月）】

6月ごろから作業時の服装の乱れが気になる生徒がいた。そこで「作業にふさわしい服装」をテーマにミーティングを行った。作業のしやすさや安全面、天候など色々な条件に合った除草を行う際の服装をみんなで考え、意見を出し合った。最終的に、除草作業は「動きやすく怪我をふせぐ服装で行うのが良い」と全員で共通理解することができた。

【窓ふき研修会（10月）】

窓ふきは、天候に左右されることがなく、定期的に行えるクリーン工房の中心的作業であるが、作業を行う際の本校の手順と社会人の手順や評価基準とに違いがあることがわかった。そこで、窓ふきの手順を全員で共通理解するための研修会を持った。実際に窓ふきの実技を見ながらメモを取り、工程の確認を行った（図Ⅲ-3-8参照）。次に、意見を出し合いシンプルでわかりやす

い手順表にまとめた(図Ⅲ-3-9参照)。最後に、気を付けることや仕上りの基準を全員で確認し、共通理解を図った。

クリーン工房 研修会
平成26年10月21日(水)

窓ふきの研修会ですること
 1. 準備する道具の確認
 2. 手順の確認
 3. 詳細のポイント
 4. その他

○窓ふきで準備するもの

バケツ1つ	洗剤
雑巾2枚	青雑巾1枚 白雑巾1枚
ウォッシャー	
洗剤	
スクイジー	
エクステンション	

○窓ふきの手順

- ①バケツに水を入れる
- ②水に洗剤を入れる
- ③白で雑巾を絞る
- ④窓わくを白雑巾でふく
- ⑤ウォッシャーをいましてガラスをふく
- ⑥スクイジーで水滴をとる
- ⑦青雑巾で残った水滴を吸いとる
- ⑧確認する

図Ⅲ-3-8 生徒の記録した工程

窓ふきの手順

- ① バケツに半分くらい水を入れる
- ② 洗剤を少し入れる
- ③ そうきん(白)をぬらす・しぼる
- ④ そうきん(白)で窓わくをふく
- ⑤ ウォッシャーでガラスをふく
- ⑥-1 スクイジーで上から横方向に水を切る
-2 スクイジーでたてに水を切る
- ⑦ そうきん(青)で窓わくをふく
- ⑧ 確認する

○気を付けること

- ・ 一回ごとにスクイジーをそうきん(白)でふく
- ・ 最後にガラスの周りや下に残っている水滴をふき取る
- ・ 室内の清掃をするときは、ガラスの下にそうきん(大)をおいて水滴で床をぬらさないように気を付ける。

図Ⅲ-3-9 研修会で共通理解した工程

ウ. 生徒の様子と考察

【自己効力感を高めたF男】

F男は、ミーティングで一番大変だった仕事と楽しかった仕事を尋ねた際に、窓ふきを挙げている。F男は初めて窓ふきに取り組んだ時、雑巾を上手く絞ることができず、次の工程に進めなかったという経験をしており、窓ふきは苦手な作業だった。そこで、絞りきれない雑巾をウォッシャー代わりにし、スクイジーでふきとるやり方を勧めた。するとスクイジーをうまく使って作業を行うことができた。その時、作業を行っていた小学部の教室で、その場にいた教師が「ありがとう。すごくきれいになったね。」と声をかけて評価をしてくれた。自分もやればできるんだという気持ちを持てる直接的な評価や声かけは彼の自信につながり、達成感や充実感を感じることができ、「大変だったけど楽しかった」という言葉につながったのではないかと考える。

【役割と責任を自覚したE男】

小学部のなかよし広場の除草作業では、納期を設定して取り組んだ。納期日の作業終了時間が近づいた時、E男と教師の間で以下のようなやり取りがあった。

E男 「このままで終わるのでしょうか？」

教師 「どう思う？」

E男 「このままでは間に合わないような気がします。」

教師 「じゃあ、どうする？」

E男 「僕、残ります。気になるので。」

このやりとりの後、社会人が勤務を終える時間まで一緒に 50 分間残業を行った。作業を終えて一緒になかよし広場を眺めながら「納得できましたか？」とE男に聞くと「まあ少し納得できました。でもちょっと納得できませんね。」と答え、どうしてかと尋ねると「終わっていないからです。」と答えた。後日、もう一度「あの時どうして納得できなかったの？」と聞くと、E男は「ちゃんと終わらせたかったからです。」と答えた。「小学部の子供たちに喜んで欲しかった。」とも言っていた。雑草だらけであったなかよし広場は、除草作業によってきれいになり、休み時間に小学部の児童が楽しそうに砂遊びをするようになった。その姿が、自分たちの仕事の必要性を感じさせる気づきにつながったと思われる。なかよし広場の除草という作業の依頼に応じて繰り返し作業を行う中で、自分の役割を感じ、最後まで作業をやり遂げたいと思う責任につながったと考える。

④ 成果と課題

作業やミーティングで意図的に社会人との関わりをもつことを通して、生徒の意識の変化や行動の改善を期待し、協働作業を行った。ミーティングで「なかよし広場の除草はクリーン工場の生徒だけでできた？」と質問すると、生徒たちは「まさか。金大の人たちがいなかったら無理ですよ。」と答えた。社会人と一緒に作業する中で、生徒たちにとって社会人の彼らが頼りになる心強い存在になっていたようである。そこで「社会人のどんなところを手本にしているか」の質問をしたところ、どの生徒も「草のむしり方」や「窓のふき方」など技術面に関することを挙げた。技術面は生徒にわかりやすく教師も伝えやすいが、社会人の仕事に対する姿勢やふるまいなどの違いに気づかせるためには、その場で言語化したり、問いかけを行ったりするなど生徒の気づきを促すための支援が必要であると感じた。

また、社会人にとっても本校での仕事は初めて行う作業が多く、彼ら自身もモデルになっているという意識は薄かった。それは、同様の支援が社会人にも必要であるからと考える。

これらの課題については、今年度の経験を生かし、来年度も社会人と協働した作業学習を行う中で継続して取り組んでいきたい。

3. 地域資源を活用した実践

「チャレンジ工房の製品がどのように役立っているのかを知ろう」(平成 25 年度)

(1) はじめに

作業学習においては、現実の社会との関わりの中で作業製品が認められれば、働く喜びや意欲につながるとされている。もの作りの作業種のうち、販売活動を行える作業種においては、販売会等でお客様からの評価を受けることができるが、販売活動を行いにくい作業種においては、評価を受けにくい状況にある。この実践は、生徒たちが本校高等部で製作している梱包用緩衝材がどのように使われ、どのような評価を受けているのかを知るために行った実践である。

(2) チャレンジ工房の概要

チャレンジ工房では、梱包用緩衝材の製作、バリ取り、クッキー製造で用いる拭き取り紙の準備、シュレッダーかけ等の作業を行っている。このうち梱包用緩衝材は、石川県白山市にある雑貨店から依頼を受けて製造しており、通信販売で注文を受けた商品を発送する際に使われている(写真参照)。梱包用緩衝材は、英字新聞を使い、図Ⅲ-3-10で示した各工程を分業して製造している。



本校で製作している梱包用緩衝材

(3) 生徒の実態

平成 25 年度は、1 年生 1 名(男子)、2 年生 4 名(男子 3 名、女子 1 名)、3 年生 1 名(男子)、合計 7 名の生徒が所属していた。一般就労の可能性のある生徒が 1 名、就労継続支援や生活介護を希望する生徒が 6 名である。生徒たちは、構造化された作業環境の中で、所定の位置にいる教師から作業の材料を受け取り、作業に取り組み、出来上がったものを教師に渡して報告する、という一連の活動に自ら取り組んでいる。

- ① 裁断した新聞紙をたたむ
- ② ペーパーホッチキスで仮留めする
- ③ 仮留めした部分にテープを貼る(①を袋状にする)
- ④ 紙を丸め、③に詰める
- ⑤ ④にテープで封をする

図Ⅲ-3-10

梱包用緩衝材製作の工程

本校高等部で行っているもの作りの作業のうち、菓子工房の製品であるクッキーについては、高等部の多くの

生徒がお客様に販売することを直接体験しているが、チャレンジ工房の製品である梱包用緩衝材については、各工房の作業製品を配達する作業班が納入しているため、高等部の多くの生徒は、どこに納入しているのか、納入後どのように使われているのかを十分に把握していない状況であった。

そこで、納入先の雑貨店の方に来校してもらい、高等部の生徒全員に対して、作業製品がどのように使われ、どのような評価を受けているのかを紹介してもらうことにした。

(4) ねらい

チャレンジ工房で製作している梱包用緩衝材の用途や第三者からの評価について知る。

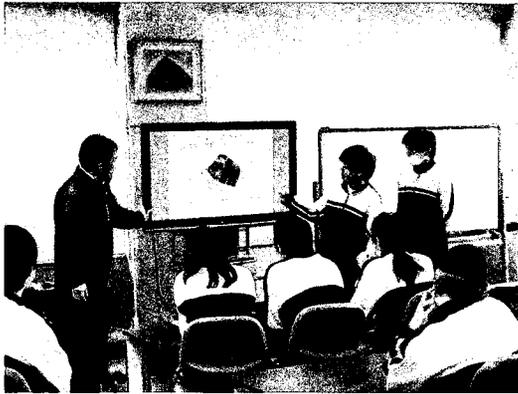
(5) 実践の経過

① 納入先の方を招いての授業

授業は、平成 25 年 12 月に進路学習として行った。授業の前半では、チャレンジ工房の生徒が梱包用緩衝材について紹介した。また、各工房の作業製品を配達している作業班の生徒が、納入先の雑貨店について紹介した。その後、教師と雑貨店の方とでやりとりをしながら、梱包用緩衝

材の用途や評価について紹介した。いずれの場合も、教師が予め作成したスライドをもとに進めた。雑貨店の方からは、次のような話があった。

「通信販売では、緩衝材が店のイメージにつながっている」
「緩衝材にできるだけ値段をかけないように、どの店も試行錯誤している」
「本校の緩衝材は、お客様から良い評価を受けていて、しかも値段が安いので、とても助かっています」



梱包用緩衝材についての生徒の説明



雑貨店の方と教師とのやりとり

お客様の感想



評価 ☆☆☆☆☆ (5.00)

「緩衝用に入っていた四面体(って言えばいいのかな?)に折った新聞紙がかわいくて、遊び心のあるステキなショップさんだなあ~と思いました。」



インターネット上での雑貨店に対する評価

本校の梱包用緩衝材が
ガラス製品の梱包に使われている様子

梱包用緩衝材の紹介や質疑応答の後には、生徒たちが感想を書いた。感想には、次のようなことが書かれていた。

「割れ物を防ぐとは知らなかった」
「お客さんに喜んでもらってよかった」
「僕もチャレンジ工房をやりたい」 等

② その後の展開

授業後には、授業で用いたスライドを使って掲示物を作成し、高等部の掲示板に貼った。掲示によって、高等部の保護者や高等部以外の教員等にも、チャレンジ工房の作業について理解してもらったようである。

また、チャレンジ工房で取り組んでいる作業がどのように役立っているのかをまとめた掲示物を教師が作成し、作業室に掲示した。掲示物は、生徒に伝える際に使うだけでなく、来校者が参観された際にも使っている。

チャレンジ工房の生徒のうち、一般就労の可能性のあるG男には、これまでも「(梱包用緩衝材の)中身をつぶさず、膨らませるように」と教師が伝えてきたが、十分に伝わっていなかった。しかし、納入先の雑貨店の方から直接話を聞いた後の作業学習では、梱包用緩衝材の中身が膨らむように意識して製作するようになった。ガラス製品の梱包に梱包用緩衝材が使われている写真を見たり、雑貨店の方の話を聞いたりしたことで、自分たちの作業に対する理解が深まったようである。作業の仕方を伝えることに加えて、自分たちの作業製品がどのように使われているかを伝えることが必要であったと思われる。

一方で、他の作業種を担当している生徒の中には、自分の担当している作業種と結びつけて理解することが難しい様子が見られた。

(6) 評価と考察

作業製品の納入先の方から直接評価を受けたことで、生徒たちはチャレンジ工房の役割について改めて認識することができた。そのことで、作業製品の質の向上にもつながった。今回は、教師が納入先の方と生徒とを仲介しながら授業を進めた。教師が仲介役になることで、納入先の方と生徒の双方にとって理解が深まったようであったが、十分に理解できなかった生徒もいた。外部講師を招いた授業を行う際に、教師がどのように仲介していけばよいのかを引き続き検討していきたい。

参考文献

1. 木村宣孝 (2013) 『『キャリア発達を促す教育』の理念と知的障害教育における在り方』 本校職員研修資料
2. 中坪晃一 (2012) 「作業学習—そのよさと意義を再確認する」 特別支援教育研究 662号 東洋館出版社



チャレンジ工房の取引先についての
掲示

4. まとめ

本研究ではキャリア教育の理念を日頃の学習活動の中にどう具現化するのか、そして実践的試みを通して社会との相互作用における生徒のキャリア発達の変化とその関係、そこでの教師の役割について考察した。

今回の実践的試みは社会との相互作用を念頭においた取り組みである。具体的には「作業学習の充実改善」と「外部講師の活用」である。

(1) 実践的試み

① 大学生協、大学と協働した実践的作業学習の展開（カフェの運営）

この試みは地域の中での販売活動を通して校内だけでは得られない店舗運営の実際を学んだり、一般客への対応の仕方を学んだりすることで仕事への心構えや態度が身につくことを期待した取り組みである。

具体的には金沢大学医薬保健学域の医学図書館でカフェを開設して管理運営を行った。

② 障害のある社会人と共に働きながら学ぶ作業学習の展開（環境整備）

社会人との協働を通して働くことへの姿勢や取り組み方、お金をもらって働いている意識の差、技術の差などを作業の中で感じ取ってほしい、身近に特別支援学校の卒業生である社会人がいることで間近に迫った卒業後の生活をイメージすることができるのではないかなどの作用を期待した取り組みである。

具体的には社会人と共に除草作業や窓拭き、プランター苗植え、剪定作業などを行った。期待した作用が機能することを意識して折にふれてミーティングを行った。

③ 地域資源を活用した授業実践

高等部では、生徒が作った製品が認められることで働く喜びや意欲につながることや、製品納入を通して自分たちの作業活動を意味づけ、さらに良い製品を製作しようとする意欲や自己効力感を高めること⁽³⁾を期待して、作業学習の製品の納入先等の事業所の職員を講師として授業を実施した。

具体的には梱包用緩衝材を納入している雑貨店の方に来校してもらい、緩衝材がどのように使われ、どのような評価を受けているのかを紹介してもらった。

(2) 成果と課題

今回の取り組みは社会との相互作用を学習に取り入れることによって生徒のキャリア発達を更に促そうというものである。今回の実践では学校での学習と外部資源を結びつける授業が生徒のキャリア発達において有効であることが示唆された。以下にその有効性について2つの視点(①②)から実例を挙げて考察する。

① 社会との相互作用における生徒のキャリア発達の変化とその関係

A. 生徒の変化から内面の成長を評価する

【エピソード1 接客態度の向上】(紀要 P78 参照)

A男は初対面の大人に敬語を使えないこともある。しかし、格好よい振る舞いを知ろうとしたり、できるようになりたいという気持ちが強く接客への取り組みが進むにつれて自分のことばを改善させながら客とやりとりをして言動や行動をどんどん身につけていった。本生徒は書字読字に困難があり、伝票の記入も遅かった。しかし、レジの操作に強く、一連の支払い業務を早く処理できるという側面も見つかった。

吉川⁽¹⁾は「子どもは日々の生活にある具体の事象、即ち、他者や物との相互作用に身をおいてそれらに働きかけ、生じる結果に対する直感的な情動体験と共に、その具体的行動結果としての事象の変化から知識を獲得すると考えられる。子どもはそれまでに獲得した既有知識を基に生活世界の出来事を理解し、その理解に基づく判断をして行動する。」と述べている。

A男本人の「望み」実現に向けた自発行動が、関わる他者や物（客への対応、レジ打ち）との間で調整されながら変化していった様子が伺われる。このような良循環の中でA男自身が「望ましい接客」についての既有知識の更新や拡大を行ったと思われる¹⁾。

イ. 要求やニーズをもてる存在に育つこと

【エピソード2 自分の仕事に自分の意図で取り組む】（紀要 P77 参照）

プラタナスカフェを「自分たちの店」として捉えることで、「よい店作り」の意識が生まれ、行動目標を生徒の言葉で具体化することで、生徒はそれぞれが自分の言葉でお客様に対応するという柔軟な接客をしており、自分の意図を持って仕事に臨んでいると考えられた。

【エピソード3 自己効力感を高めたF男】（紀要 P85 参照）

社会人との協働作業の中でF男は当初は窓拭きが苦手な作業であったが、スクイジーをうまく使って作業をすることができるようになり、「自分もやればできるんだ」という気持ちを持てた。直接的な評価や声かけが彼の自信につながり「大変だったけど楽しかった」と言う言葉につながった。

子どもは同じ活動を繰り返す中で、その時間にすることがわかるようになっていたり、そこで知り得た知識を次時に採用したりすることができるようになる。つまり、既有知識を新たな知識と関連付けていく営みがなされると思われる⁽²⁾。エピソード2において、当初は「良い店にするためにどんなことをすればよいか」のイメージが持ちにくかった生徒も実際にカフェでの備品の整備や接客などを通して自分が何をすればよいかが見えてきたと思われる。エピソード3においても苦手であった雑巾絞りをスクイジーとの併用で窓拭きが自信がもてる得意種目に変化している。自己効力感は次の新たな目標への原動力の1つになると思われる。具体的にイメージできるような知識や方法を提供することで、より具体的なめざす目標（要求、ニーズ）が見えてくると思われる。

ウ. 責任と役割の自覚

【エピソード4 除草作業中の出来事】（紀要 P85 参照）

E男は除草作業が納期に間に合わないことを心配して、教師に相談を持ちかけた。そして「残業」を自分で決めた。数ヶ月後に「ちゃんと終わらせたかったから。」と発言している。

【エピソード5 緊張感が生徒を変える】（紀要 P80 参照）

プラタナスカフェでは校内とは違った緊張感がある。生徒の抱えるプレッシャーは大きいが、緊張感の中に懸命に取り組むことが生徒の変容に大きくかかわっていると考えられる。生徒の変容として例えば、以下のことが挙げられる。

- ・カフェの営業時間に合わせて自分のスケジュールを調整できる。
- ・他者の目を意識した立ち振る舞いを心がける。
- ・言葉遣いや態度を互いに評価しあい改善するようになった。他者の評価を求める。

- ・校内の店に来客があると作業を中断して客の対応をする。以前と比べて対応の速さが違ってきた。
- ・生徒が食事中の教師に「お食事中失礼します。」と声をかけてから用件を話す。言葉遣い、礼儀に関心を持って改善しようとする姿が見られた。
- ・「図書館のほうが楽しい。学生さんたちがたくさん来てくれるから。」（生徒の発言）
- ・「図書館に行くときはうまくできるか不安になる。でも図書館に行くことは嫌じゃない。自分でもなんでかわからん。」（生徒の発言）

日頃の慣れた場所や人とは違った環境に身を置くことでの緊張感がプラスに作用していると思われた。

【エピソード6 製品の使われ方を知ることによって変わった生徒】（紀要 P89 参照）

教師の具体的な実技指導では「クッション性が増すように作る」点において改善が見られなかった生徒が、クライアントから直接感想を聞いたり、製品の用途を知ったりすることによって製品の質を格段に向上させることが出来た。自分の仕事の使命を理解することで、行動を変えることが出来たと思われる。

森脇⁽³⁾は鷲田清一氏のことばを引用して「責任の意味とは自ら進んで他者の求めに繰り返し応えること」と述べている。除草作業そのものは環境整備の中の一作業であるが生徒Yは除草作業を通して「求めに応える」責任と役割を担えたと言える。プラタナスカフェの実践に伴い見られた生徒の変容もまた「来客の求めに応える」という意味での責任と役割がもたらしたものであると思われる。緩衝材の納入先からの外部評価を聞いた生徒も「納入先の求めに応える」という責任と役割を自覚したことが製品の質の向上のきっかけになったと思われる。

② キャリア発達支援を促す教師の役割

【エピソード7 目標を行動レベルで言語化】（紀要 P77 参照）

〈丁寧な接客〉〈素早い接客〉〈清潔な店舗〉などの理念だけでは生徒の振る舞いは改善に結びつかなかった。「丁寧な接客、素早い接客とはどんな接客なのか?」「清潔な店舗とはどんな店舗なのか?」を生徒に問いかけつつ、「両手で商品を渡す」「髪の毛は帽子の中に入れる」「お客様がいらっしゃったら現在の仕事を止めてすぐに接客する」などの具体的な行動の仕方をことばにして伝えることが必要であった。

【エピソード8 「生徒の気づき」に教師が気づく】（紀要 P79 参照）

生徒から「コーヒーカップに指が入らないようにしよう」という意見が出たことを受けて『手厚いもてなしのありかた』や『客の気持ちを考える』といった接客の際の技術的な向上だけでなく精神的な在り様について話し合う良い機会となった。

【エピソード9 社会人をモデルとした協働作業】（紀要 P86 参照）

意図的に生徒と社会人をペアにして作業を行っても、彼ら自身が生徒の手本となっているという意識は薄いように感じる。社会人から生徒へ技術を伝える場面をつくるためには、社会人にも生徒に対しても教師の声かけや支援が必要となった。

吉川⁽¹⁾は「教師には子どもたちが自分の既有知識を足場にすることによって、より高度で成熟した理解に到達できるように指導することが重要である。」と述べている。更に「子ども自身による行動の実行とその結果を自らが評価しようとする働きかけが必要である。そのために教師は指示的・説明的に学習を進めさせるのではなく、子どもに『問う』ことを通して既有知識や信念を探ると共に新たな気づきを促すこと、そしてこの観点で、子どもの変化に注意深くなることが指導における重要な役割である」と述べている。

生徒に問う、具体的な助言による知識の修正を促すことで誤信念について生徒に気づきを与える、生徒自身の気づきを促す、そのことが次回からの行動の改善につながることを再認識した。

周知の通りキャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」である（文部科学省⁽⁴⁾2010）。渡辺ら⁽⁵⁾は「将来自立的に生きるための力として、もっとも基礎的で誰にでも求められる力は、各個人が自分自身と向かい合って自分に問いかけ、自分に答える力である。」と述べている。カフェの体験や社会人との協働作業の体験、そして製品納入先の業者の話聞くことを通して生徒各自が自分に問いかけ、答える力⁽⁶⁾を培ってきているように思える。

今年度は作業学習モデルプランの実践1年目であり、図書館カフェや社会人との協働作業において生徒への指導と共にそれぞれの立ち上げの仕組み作りにエネルギーを費やしてきた。それぞれの課題は当該箇所にて述べられているが、仕組みが軌道に乗れば次年度に向けて課題の解決への取り組みが一層加速していくと思われる。

引用文献

- (1) 吉川一義（2010）「平成 21 年度 本校研究紀要」
- (2) 平成 24 年度 本校研究紀要
- (3) 森脇勤（2014）「キャリア発達を促す地域協働型活動の創造」特別支援教育研究 687 号
東洋館出版社
- (4) 文部科学省（2010）「キャリア教育・職業教育特別部会第二次審議経過報告」 p.15
- (5) 渡辺三枝子 鹿嶋研之助 若松養亮（2010）「学校教育とキャリア教育の創造」学文社

参考文献

- 1) 平成 21 年度 本校研究紀要